

独立心について——「読書雑記」のうち——

小倉金之助

自由民権思想

一九五二年十月二十五日発行の、岩波講座『教育』第八巻『日本の教師』に、「政治と教育」という共同研究があった。執筆者は勝田守一、辻清明、丸山真男、宮原誠一、宗像誠也の五氏で、進歩的な面白い研究であるが、そこに次のようなことが書かれている。

「要するに今の世の中は、今の政府の出す法律に従うべきで、共産党が天下をとったら、またその法律に従ってゆけばいい。そういう考えをよく日本人の保守主義だというけれども、それは保守主義などという上等のものでなく、むしろオポチュニズムである」（丸山）。

「明治以来の日本の学校は、絶対主義的な官僚支配のもとにあった、そういうような絶対主義勢力に身も心も属していた長い間の教育界の伝統が、現在も深く残っている」（宮原）。

このような意見はそれぞれおもしろい。けれども私はこう考える。日本がそのようになったのは、絶対主義政府が明治十八年（一八八五）に成立して、やがて帝国憲法、教育勅語が天下るようになって、一層強化されるようになってからだと思う。その点に関しては、河出書房の『日本歴史講座』第五巻

「近代篇」(Ⅰ)に、新しい研究があつて面白い。中でも、石井孝氏の「明治維新の国際的環境」は大膽な議論だと思ふし、猪野謙二氏の「日本近代文化の特質」は興味深かつた。まあそれはそれとして、話をそらさず私の考えるところを述べよう。

私が最近読みなおした資料の中に、明治十二年(一八七八)の自由民権運動華やかなりしころのものがある。有名な数学者の上野清によつて編集された『数理叢談』という雑誌は、明治十二年(一八七八)に発行されたものだが、その中に、時代を反映した面白い文章が見出される。たとえば「雖然しかりとはいへども政府ノ事業ハ器械ヲ用ヒ其功ヲ竣ル殆ほとト欧州ノ最高点ニ達シ、人民ノ事業ハ人力ニノミ頼リ唯其活業ヲ図リ尚なお未タ欧州旧時ノ最低点ニ達セス。政府ノ事業如かくのごとく此夫レ盛ニ、人民ノ事業如かくのごとく此夫レ衰フ。」——数学雑誌でさえも、こういふ調子で述べ立てている。

またこの間読んだ『教育五十年史』(国民教育奨励会編纂・民友社発行・大正十一年(一九二二)刊)に、東京府会が明治十三年(一八八〇)に開かれた当時、府会には師範学校や中学校の経費予算を出したが、府会ではそれを全く否決してしまつた事件が記されている。何故そうなつたかという点、当時府会には自由思想家が沢山いたのであるが、彼等はいふ考へたのである。地方税でもつて中学校など設けなくとも、その位のことでは私立学校で十分である。師範学校など作つて教員を養成するなど無用のこととだ。「古より碩学俊傑は官公立の学校から輩出したためしがない」。その時代における民間人の意氣盛んなことかくのごとくである。それが数年にして絶対主義官僚の手によつて潰されたのである。

明治政府の卑屈性

『数理談叢』は、官僚政治に対するまことに辛辣しんらつな批判に富んだ雑誌で、時代を反映した面白い文章が数多く見出される。その中の一つに、明治十二年（一八七九）九月号に『榴球』ざくろという題で、次のような絵を挿入した愉快的算数問題が載っている。



榴球りゅうきゅうも今年内地（オット）
内庭へ移し培養致します……

ところでこの『ざくろ』をかたどった数式を計算すると次のようになる。

$$\frac{1 \times 80010}{13 - 12} = 80010 \text{ (やまと)}$$

すなわち「八〇〇一〇は、八万十↓やマト↓やまと」となって『琉球は日本の帰属になる』ということを示している。明治十二年（一八七九）という年は琉球問題のやかましかった時で、日本はこの年クーデターを行って琉球藩を廃して、新たに沖縄県を置いた。こういった歴史的背景を考えてみると、この絵と文章はなかなか深い意味を持っていることが分るだろう。

ところで琉球問題については、当時のイギリス公使パークスから、日本政府に対して抗議が出た。そのパークスの抗議に対し、時の明治政府は平身低頭、やっこのことで彼をなだめて一応結着させ

た。しかし明治十二年（一八七九）十一月七日の『数理叢談』は、絵と文でつぎのように諷している。



君み左様そらうパ、ア、クス、パ、ア、クスと煙草たばこ
 を喫のみて居ゐては談判が片附かぬから早
 く返答仕玉したまへと議論ぎろんが有升ありますが其結局
 如何いかん

この図の数式を計算すると、つぎのような数式になり、つまり右と左ともに10と10だから、この談判は五分五分で、パークスの抗議に対する日本政府の「はね返し」が強くなされていない、という洒落である。

$$\begin{array}{r} 1-1 \\ \hline 4 \\ \hline 6 \end{array} + 2 \times 5 = 10 \qquad \begin{array}{r} 1111636 - 9111 \\ \hline 6 \times 71111111 \\ \hline 0 \end{array} + 10 = 10$$

パークスというのは前々から日本の外交に好意を持たなかった男で、私が『資本主義時代における科学』を書くとき読んだ、清沢洌の『外交家としての大久保利道』（中央公論社、昭和十七年（一九四二）刊）によると、パークスは、その数年前の台湾事件（明治七年（一八七四）の時に、次のようにいっている。

「台湾への派兵が単なる海賊的襲撃であることは疑う余地はない。台湾人が果して日本の国民であるかどうか、ということが問題である。もしそうであればその是正は、まず外交的方法を以て進められねばならぬ。しかし遠征は何等の通知なくして行われた。」

なお、パークスは日本政府への手紙に、ろくに敬語も使わなかった。日本歴史講座第五巻『近代篇』の石井孝氏の「明治維新の国際的環境」を読むと、次の個所が目にとまる。

「……かかる半植民地的状態の強化に対して、世界資本主義の援助によって成立し、したがって買弁性をもつ明治政府は、それに抵抗しえずして、きわめて卑屈な態度をとらねばならなかった。パークスが明治政府の大官をよんで、となりつけたという話のごとき、もっともよくこの明治政府の性格を示す。」

以上いろいろな話から読者は、人民に対して横暴を極めた明治の絶対主義的政府が、強力な先進国に対しては、独立心がなく、どんなに卑屈なものであったかがわかりであろう。

生活とたたかう人を

さて独立心ということに関連して、こんどは最近読んだ『私たちの生活百科事典』（生活百科刊行会）と『発明発見図説』（岩崎書店）の話をしよう。

私は今病床にあるので、このような事典を、少しずつゆっくり読んでみたが、なかなか面白い。最近こういった青少年向きの非常に進歩的で立派な事典類が発行されて来たのは、まことに喜ばしい。戦前岩波書店で『少国民のために』という叢書をはじめたとき、私は非常に感心して岩波茂雄氏に

こういった。『大変立派なものが出ましたね。しかしこれは子供に読ませるよりも、ぼくたち大人が読んだらいいと思う』。その時岩波氏は『そうですとも。これはぼくたちが読んで丁度いいものですよ』と。

そこで二人は呵々大笑かかしたことがあった。こんどの両書を読んでもその感がある。ことに『生活百科事典』の工場篇、歴史篇、世界の旅篇、科学篇および社会篇などは、企画者の大野三郎君の考えと思想が一貫しておつて、極めて進歩的である。これは学校や図書館にばかり積んでおく本ではなく、子供をはじめ知識人も一般人も是非読んでもらいたい。

なおこれにふれて一言したいことがある、学校の先生からある問題を調べて来いといわれて、生徒がこういった事典を書き写すことは、無意味であるばかりでなく有害である。

私が学校の先生たちに強く望みたいのは、小俐巧こりこウな人間を作ることやは止めてもらいたいということだ。学校では、實際生活に臨んで何処までも疑いを持ち、それを突き破つて、自分の生活と闘いながら、生きていく人間を作るのが望ましい。私は今の日本の教育の目的が、平和な日本を作り上げて、新しい世界を建設して行く、そしてこういふ意味での社会改造のために戦うような人間を作ることをを希望する。権威や富貴に屈しない、独立心のある人間を作る上に、こういう事典は大きな貢献をするであらうと思う。

林鶴一博士の独立心

独立心の強い人として私は林鶴一博士のことを語ろう。今朝私は東北大学発行の“Tohoku Math-

emathical Journal”(東北数学雑誌)の第二集四卷二号(一九五二年十一月)を受けとった。そしてそのなかに「東北数学雑誌の第一巻―第十巻までを近く、リプリントして海外に配布する……」という広告文が入っており、私は非常な感激をおぼえた。

というのは、この雑誌は今から四十一年前、仙台に東北大学が創設された時、林先生の私費で公刊されたものである(その後第九巻の途中で大学の出版に移ったが)。創刊の時から、日本人のみならず、西洋の学者にも寄稿を求め、数学論文の国際的な発表機関たらしめようとしたものであった。しかもこの様な大胆な計画は林先生が、まったく独力で始められたのである(なお林先生の共編者として、最初これに参加したのは、藤原松三郎、石原純、窪田忠彦、掛谷宗一の諸先生と私であった。それが四十一年後の今日、この雑誌は「数学における不朽の作品」として、世界的にその価値を認められている。しかも第一巻から第十巻までの古い雑誌のリプリントが、今日再び出るといふ。これはまったく一つの奇蹟であるといえよう。この奇蹟は、けっきょく林先生の強い独立心から、生まれたものであった。

今日日本人がどんなに苦しく不安であっても、日本人が確乎たる独立心をもって、本当に結束して平和を守るために闘うならば、どこまでも戦争を回避し、また日本の真の独立をもちえられると私は確信する。奇蹟は起りうるのである。来るべき新年をむかえるに際して、私は「奇蹟を起せ、日本人よ、真の独立心を持って」と叫びたいのである。

終りに、世界的にその価値を認められ、日本の数学の勃興に大きな貢献を与えた『東北数学雑誌』の創始者林先生今は亡く、藤原、石原、窪田、掛谷の諸先生も逝去され、私一人だけになってしまった。感慨無量である。

(一九五二・一二・一八病床にて口述)
〔昭和二十八年(一九五三)一月一日図書新聞所載〕

-
- 『近代日本の数学』（新樹社、一九六三年三月、第四版）所収。
 - 読みやすさのために新仮名遣いによる振り仮名を付加した。
 - 引用文中の仮名遣いは底本のままにした。
 - PDF化には $\text{L}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}2_{\epsilon}$ でタイプセッティングを行い、 $\text{d}^{\text{v}}\text{i}^{\text{p}}\text{d}^{\text{f}}\text{m}^{\text{x}}$ を使用した。
 - 科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」
<http://www.cam.hi-ho.ne.jp/munehiro/scilib.html>
 - 「科学図書館」に新しく収録した文献の案内 「科学図書館揭示板」
<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>